

NHKテレビで『特報フロンティア長崎原爆・爆風地図』という番組を観た。昭和二十(一九四五)年八月九日、午前十一時二分、長崎に原子爆弾が投下された。十一日後に明治専門学校(現九州工業大学)の調査団が爆心地に入って調査、当時の藤田哲也(一九二〇〜九八)助教役らによって爆風地図が作られた。昨年、北九州市小倉南区中曽根の藤田遺族宅で保管していた地図や写真が見つかり、長崎市に寄贈された。

地図は、爆心地の浦上地区を中心に爆風被害による痕跡を赤色の濃淡で示している。それを現在のコンピュータ解析による図面と重ねると、ピタリ一致する映像が流れた。分析の確かさが窺える。原爆投下後、初期の貴重な学術的調査資料だ。藤田哲也は「日本よりも、むしろ世界で名前と功績が知られた」人物。七十八歳、シカゴで亡くなった時、葬儀には当時のクリントン大統領も弔問に訪れたといわれる。

藤田は明専卒業後、昭和二十八(一九五三)年東京大学で博士号を取得、シカゴ大学から招聘を受けて渡米、気象学客員研究員となる。トルネード(竜巻)発生のメカニズム研究に没頭。実験室の研究に飽き足らず、発生源の親雲の積乱雲にセスナ機で突入するなど、パイロット

ひよんなことから利根山光人『メキシコ民芸の旅』(一九七六年、平凡社刊)を読む。表題通り、メキシコの民芸品を各地に訪ね歩く本だ。この中に、プエブラ州の山岳地帯サンパブリト村で作るアマテ紙の記述がある。「木の樹皮を大きな釜で水と石灰で煮て糊状にし、その繊維を板の上に乗せ石でたたきながらのぼしていく。そのまま天日で二時間乾燥させると茶褐色または白色の、素朴で野趣に富んだ紙」になり、歴史を記録する文明発展の土台となってきた。

だが、その後の記述が興味深かった。——村人から突然「ミヤノサスケを知っているか」とたずねられて驚いた。「いや知らない」と答えると、じつはこの村に四〇年間住んだ日本人の医師がいるというのだ。住んだというはすでに四、五年前に亡くなつてしまつたからだ。日本人のドクトルはこのあたりの松の木の多い風景に魅せられ、現地人の奥さんを貰い、無医村に人望を集めて暮らしていた。(略)息をひきとるとき村人が「あなたの骨は日本かそれともこの村か」とたずねると、「ここだ」といったので、現在この村のバンテオン(墓地)に眠っている——とあつた。利根山さんはミヤノを「メキシコの日系人

世界の気象学者・藤田哲也

仲間では「カミカゼ」と呼ばれた。「回転する積乱雲」を発見。その後、ドップラーレーダー(音の伝播で距離を測定する)の活用でトルネードが観測できることを証明。現在、全世界の主な飛行場にはドップラーレーダーが設置されている。また昭和四十六年には、トルネードの規模測定「F(フジタ)スケール」を提案。マグニチュード(M)と共に国際的な基準となつている。

さらに一九七五年、ジョン・F・ケネディ国際空港で着陸寸前に墜落した航空機の事故原因を、パイロットの操縦ミス判断をダウンバースト(下流噴流)に起因する、と指摘したが、全米の気象学者は否定。しかし翌年、藤田はダウンバーストの存在を実証した。

藤田は、アメリカやフランスなどで権威ある気象学の数々を受賞し、「ミスター・トルネード」の愛称を持つまでになつた。米の科学者ジム・ウイルソンは「藤田は直感の人だつた。普通の研究者が想像もしないようなことを思いついた」と追悼。

世界の気象の最前線を走つた彼は「父に連れられて貫山や周防灘の干潟で遊び、自然に親しんだ」のが原点だと言つた。遺骨は父母と弟の眠る曾根の地に埋葬された。

(2014・1)

地球上のどこかに

に尋ねたが、わずかに古い日系人名簿に滋賀出身とあるのを確認」できただけで、分からなかつた。だが、一人の日本人が、世界のどこかで現地に溶け込み、暮らしていることが分かつた。

メキシコといえば、一九八五年九月十九日、マグニチュード8のメキシコ大地震の折、メキシコシティの公園のベンチに寝ていて揺り落とされ、目の前のビルが崩れるなどして大混乱に向かう——。福岡県みやこ町黒田の黒田神社宮司を辞めて世界放浪に出ている定村直孝さん(当時三十七歳)のそんな話を思い出す。

彼は、アメリカをはじめカナダ、中国、ヨーロッパ、南米など自由な一人旅を続けていた、車を捨て、歩いて「日本神道」を見つめ直そうと、あの時「三十五カ国は回つた」と言い、「これからも歩きます」と別れ、五十歳前半で亡くなつたと聞く。地球上にある国の土は全て踏んで、彼は逝つた、と思う。

近年、世界各地に住む日本人を探し、訪ねるドキュメンタリーが各テレビ局で制作され、評判もいい。今、多岐にわたる価値観のグローバル化の中、地球上のどこかに日本人が居て、ぶらり歩いていても不思議ではない。

(2014・2)